

～電話通訳で外国人も日本人も ハッピーなまちづくり～

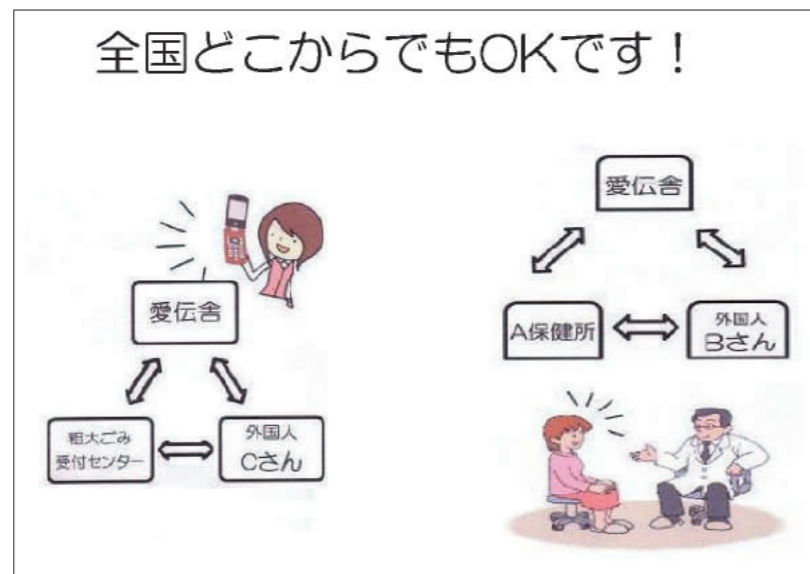
特徴・ポイント

- ・本格的な通訳サービスは高コストであるため、安価な携帯電話によるサービスを展開
- ・ゴミだしの考え方や騒音問題など、日本で暮らす方法についてのガイダンスも実施
- ・通訳を通じて得た、外国人を取り巻く生の問題情報を行政に提供

事業概要

外国人、特にブラジル人の出稼ぎ労働者が多い三重県において、携帯電話のスピーカーフォンを使った通訳サービスを展開。保健所や県営住宅など、通訳が必要な場所に通訳がないことで起こる問題の解決に取り組む。また、外国人への住宅ガイダンス（日本での生活の仕方講座）などの活動を行なうことで、外国人と日本人の両者が安心して共存できるまちづくりを目指している。

実際に通訳が活用されている場面の例



通訳さえあれば解決できる問題が数多くある

お互いに言葉が通じないが故に、単純なことで複雑な問題に発展してしまう。父親の仕事がなくなったとたん、日本のセーフティネットにのらず、家族ともども深刻な状況に陥ってしまう。そのようなケースが外国人集住地域では後を絶たない。そんな中、「通訳が必要な場所に、確実に通訳サービスを」というコンセプトから、携帯電話による通訳サービスが始まった。日本語がよく分からない外国人が来たとき、愛伝舎に携帯で電話をかけると、すぐその場で通訳をしてくれる。携帯を耳に当てて話すのではなく、スピーカーフォン機能を使用すれば、その場にいる外国人、日本人みんなが通訳を聞きながら理解し合えるのである。

このアイデアを思いついた坂本さんたちは、早速、県が募集するNPOの協働事業に応募した。

県営住宅に住む人達の通訳サービスを提案し、それが採択を受け県の事業として安定的に事業をスタートできた。この取組が新聞記事となり、その記事を見た保健所の人からも「是非、このサービスを使いたい」と声がかかった。まさに、多くの人が待ち望んでいたサービスだったのだ。

地域の日本人にとっての意味

この通訳サービスは、外国人にとって助かるというだけではない。地域の日本人にとっても大きな意味がある。例えば県営住宅では、今まで、言葉の壁から家賃の滞納に対応できていなかった。そこに通訳が入れば、簡単に対応ができるようになる。外国人と共存しながら街を維持することにつながるのだ。

このような目的から、通訳サービスだけでなく、住宅のガイダンスも行なうようになった。外国人のゴミだしのマナーや騒音は、地域住民の悩みの種であった。しかし、これは単純に、日本でのゴミだしの方法を知らないということだけ起こっているだけの側面もある。それを誰も伝えていなかっただけのことだ。そこで行政からの委託を受けて、ガイダンスを開始した。その結果、多くの自治会から感謝され、外国人に対する日本人側からの見方も大きく変化したようだ。実際、高齢者と外国人世帯がほとんどという団地もあり、そのようなところの自治会は外国人が盛り上げてくれないと成り立たない。

あくまでも、外国人だけのためではなく、日本人のためだけでもなく、共存共栄に貢献したいというのが愛伝舎の基本姿勢である。



熱気あふれる住宅ガイダンス

ボランティアではなくビジネスとして取り組む

今現在、収益の柱となっているのは行政からの委託事業である。県営住宅や保健所など行政サービスが存在しているところには、必ずと言ってよいほど通訳の必要性が存在している。愛伝舎には通訳サービスを通じて、外国人を取り巻くトラブルや問題について、どのようなものがあるのか、その実例が数多く蓄積されている。これらを行政側にもフィードバックすることで、行政サービスの改善にもつながっている。また、このような知識、経験を持った上で、通訳を行なっていることが、行政側からの信頼になっている。

最近では、行政だけでなく、広くサービス活動を展開しているが、そうした中で、どうしてもボランティア団体と見られ、かなり安い値段を提示される場合もある。しかし、そのような低すぎる金額では仕事を請けない。それは、他のソーシャルビジネス、コミュニティビジネスにも低価格化の影響が出ないようにするためだ。

外国人比率が高い町は、他にも多く存在する。そのような地域における先進的な取組事例として、愛伝舎の活動は注目されている。

団体名：特定非営利活動法人 愛伝舎
 代表者 坂本 久海子
 住 所：三重県鈴鹿市
 HPアドレス：<http://npoaiden.hp.infoseek.co.jp/>